

37 当院における肝悪性腫瘍に対する CB-CT の現状

星井 旭美・石川 達*・飯塚 明彦
山田 由美・渡辺 正・阿部 聡司*
武田 敬子**・根本 健夫**

済生会新潟第二病院診療放射線科
同 消化器内科*
同 放射線科**

【目的】当院では2013年12月より Cone Beam-CT (CB-CT) 機能を有する機器を導入した。肝細胞癌診断に対しCB-CTによるCT-A (第2相)のコロナ様濃染診断能につきIVR-CTの代用となりうるか検討を行った。

【方法】対象は2013年12月～2015年1月までに当院でCB-CT-A (第2相)を施行した肝細胞癌患者101例である。撮影条件は、造影レート1.0m/sか1.5m/s、造影量・delay timeは直前の肝動脈DSA画像の腫瘍濃染のタイミングから決定した。

【結果】第2相目においてコロナ様濃染像の描出が、101例中65例(64.0%)が十分な描出により診断可能であった。また、患者の病態により描出が左右されることもわかった。

【考察】造影レートに関しては撮像前のカテーテル位置や患者の病態によって変更を行わず、更なる撮影条件の改良が必要である。

38 Cone-beam CT Roadmap により、B-TACE を施行し得た再発肝細胞癌の1例

高 昌良・石川 達・阿部 聡司
小島 雄一・堀米 亮子・岩永 明人
佐野 知江・関 慶一・本間 照
吉田 俊明・星井 旭美*・飯塚 明彦*
山田 由美*・渡辺 正*・根本 健夫**
武田 敬子**

済生会新潟第二病院消化器内科
同 診療放射線科*
同 放射線科**

【背景】TACEは多血性肝細胞癌に対する治療法として広く用いられているが、血管への選択的挿入に難渋する例や、十分な薬剤投与が困難な症例が存在する。近年Cone-Beam CTが開発され、Road-Mapを含めた治療支援が可能となり、またマイクロカテーテルの進歩ならびにバルーンカテーテルの進歩により、Balloon-TACE (B-TACE)も用いられるようになってきた。今回、再発を繰り返すアルコール性肝硬変背景肝細胞癌に対し、Cone-Beam CTによるRoadMapにより選択挿入が容易となり、またB-TACEが有用と考えられた症例を報告する。

症例は64歳、男性。2006年アルコール性肝硬変と診断され、2011年8月に肝細胞癌初発しRFAで加療された。2014年8月までに多中心性発がんを繰り返し、内科的治療(TACE and/or RFA)で局所制御が得られていた。2014年11月のMRIでS8横隔膜直下に新規の腫瘍の出現とAFPの上昇も認め、12月に入院となりCone-beam CT Roadmapを用いカニューレションを行いB-TACEを施行。

【結語】Cone-beam CT Roadmapにより、B-TACEを施行し得た再発肝細胞癌の1例を経験した。選択的Cannulationに難渋したが、Roadmapがカテーテル挿入に有用であった。